

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

張雅

【所属】(助成決定時)

名古屋大学国際言語文化研究科

【研究題目】

1920～1945 年における日本人女性作家の南洋表象

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、近代日本の帝国支配圏の周縁に位置付けられた南洋をめぐる文学言説の中で、南洋に原始的な楽園を見てきた男性作家群に対し、女性作家たちは「野蛮」-「文明」の構図の元で、この楽園イメージにどのような態度をとり、どのような異民族像を作り出すのか、戦時体験で醸成された南洋イメージがいかなるものであるのかを解明することにある。国家総動員法が公布された後の 1941 年から 1944 年までの間に、約 70 名以上の文学者が国家権力の要請により、南洋訪問に徴用されている。女性作家たちも当然この国家総動員体制に組み込まれ、林芙美子、佐多稲子、小山いと子などが陸軍報道部の命令を受け、臨時徴用作家としてマレー方面に派遣された。男性作家の研究が一定の蓄積がある南洋文学の領域に、彼女たちの南洋訪問に関してはほとんど注目されてこなかった。本研究は女性作家らの南洋体験に焦点を当て、彼女たちの南洋をめぐる言説の全体像を解明することに積極的に寄与することを目指している。

【研究の内容・方法】(800字程度)

1) 資料収集

近年、植民地南洋に関する日本の政策や歴史的関係、作家の記録等の資料が徐々に公開されるようになったが、これらの資料を十分に活用した研究はまだ現れていない。特に、女性作家の南洋表象に関わる資料にはまだ眠ったままのもの少なくない。申請者は近代の日本人女性作家によって書かれた、南洋に関する文学作品やルポルタージュなどを東京の国会図書館、日本近代文学館などで収集し、それらの作品における異国風景の表象、異民族像などの記述を分析する。また、国内の婦人雑誌、新聞記事における南洋の社会状況に関する記事、庶民の女性と南洋の関わりの資料の収集も行った。

2) 資料分析

この一年の助成期間内、申請者は主に小山いと子の作品を中心に、1942 年に南洋を渡った彼女は日本の植民地統治をどのように見ていたのか、また戦後、彼女は南洋の従軍の体験についてどのように捉え直し、「他者」と自己をいかに見つめ直したのかを、社会状況を注目しながら考察した。申請者は 2020 年 10 月 17 日に開催した東アジアと同時代日本語文学フォーラムで小山いと子の『火の女』(明治書院 1950)を中心に、旧宗主国の女性作家としての小山がいかに被植民地女性を「代弁」しているのかをについて発表した。戦時中に女性作家が発表した「大東亜共栄圏」の産物としての恋愛小説には、神格化された日本人男性とそれに無原則的に従った被植民者の女性像が現れている。戦時中に日本人男性に従順な異民族の女性像を構築することは、被植民地南洋(女性)を日本の大東亜共栄圏の構図に帰属させる政治化の作業に収斂するものになるが、戦後になって、小山いと子の『火の女』は、1942 年のこととして現地人のエナの牧場の整理に携わる獣医の修三に対する態度が憎悪から好意になったことを描いている。戦前から戦後に受け継がれてきた従順な異民族女性像は、一見すれば日本人男性を引き立てるための侵犯

できる対象のままであるが、彼女たちに付与された政治的な隠喩は、家父長としての日本に親和する女性から〈帝国〉日本の抑圧性を暴き出すものへと変わった。

また、森三千代の『晴れ渡る佛印』(室戸書房 1942)や佐多稲子の『若き妻たち』(葛城書店、1944)などでは、外地で働く日本人女性が描き出している。彼女たちの南洋視察の記録には、内地の女性の南進を積極的に推奨したことも観察される。申請者はこれらの発見を土台に、そしてこれらの作品の検討を通じて、AAS-in-Asia 2020 学会で「南進女性」について考察した。

【結論・考察】(400字程度)

「徴用じゃなく懲用だ」(寺崎浩 1974:32 頁)と愚痴を吐いた男性徴用作家と比べると、「旅行」「出張」だと思われていた女性作家の、1940年代の南洋作品を総合的かつ横断的に比較しながら、彼女たちが植民地で行っていた文化交渉にも焦点を合わせて考察していく。この考察により、作家たちの戦時中と戦後における作品の表象の差異と共通点の比較を加えることを通じて、これまでの文学研究の領域で見落されてきた女性作家の南洋表象に新たな知見を呈示することができると考えられる。